文献センター通信
第45号
2019年1月1日
一部100円

アナキズムカレンダー発売！
2019年版は「近藤憲二没後50年」

恒例のアナキズムカレンダー2019年版を刊行いたしました。テーマは「近藤憲二没後50年～三代で継いできた近藤文庫」。堺利彦・為子、近藤憲二・（堺）真柄、そして近藤千浪と三代に渡り、ときに自分たちのものを二の次にしてまで、守り抜いてきた貴重な資料、特にアルバムをメインにご紹介します。

これまでは初期社会主義、アナキズム、婦人運動と個別に紹介されてきた資料を「近藤文庫」という枠組のもとに広く写真を使用、また近藤憲二を中心とした人物たちが実際に書いた文章も多く収録しました。

「このアルバムは父が『大杉榮全集』をつくるにあたり集めた写真を、その後の村木さんの獄中病死、古田さんの処刑、和田さんの獄中縊死、と相次ぐ身近な人々の裁判闘争と死に忙殺された中で取敢えず貼ったような、まさにスクラップブックで、日付けも、名前も記されていない。いま、それを見るとスクラップブックそのものが何か無言の訴えをしているような思いがしてくる」（『捨て石埋め草　近藤千浪遺稿集』より）

なお、今年は諸事情により、刊行時期が大幅にずれ込んでしまったため、販売は一部の店舗（イレギュラー・リズム・アサイラム、三月書房ほか）のみの取り扱いになります。ご理解のほど、よろしくお願いいたします。

【2019年版　各月内容】

◎1月＝三代の系譜
◎2月＝近藤文庫とは
◎3月＝大杉栄が見た近藤憲二
◎4月＝大杉栄と伊藤野枝の遺児たち
◎5月＝近藤憲二が見た大杉栄
◎6月＝近藤憲二が見た伊藤野枝
◎7月＝和田久太郎著『獄窓から』
◎8月＝平民社と大逆帖
◎9月＝堺利彦と同志たち
◎10月＝堺利彦、為子、真柄
◎11月＝無産婦人同盟と堺真柄
◎12月＝戦後の近藤憲二～アナキスト連盟と麦人社

【仕様】 A4サイズ、28ページ、頒価一二〇〇円（会員頒価一〇〇〇円）

【購入方法】 委託販売店03―3352―6916（イレギュラー・リズム・アサイラム13時―20時※月水除く）

◉会員価格での購入の方や取扱店舗については contact@cira-japana.net まで。

主な内容

アナキズムカレンダー発売！……1
追悼・柏木隆法……2
IWWライプツィヒ・ブランチ……4
高群逸枝と『麺麭の略取』……6
書評『寺島珠雄書簡集・石野覺宛』……7
書評『農本主義のすすめ』……11

【会費変更のお知らせ】

2019年から当通信の隔月刊行に伴い、会費（特典）を下記のとおり変更させていただきます。

【旧】1口1000円から入会可→1口で年4回の通信、2口以上で通信＋カレンダーの特典

【新】1口1000円、2口から入会可→2口で年6回の通信、3口以上で通信＋カレンダーの特典

変更のご理解および引き続きのご支援、何卒よろしくお願いいたします。

（運営委員会）

追悼・柏木 隆法

前号既報のとおり、『大逆事件と内山愚童』『千本組始末記』などの著作で知られる柏木隆法さんが八月二十八日に逝去されました。享年六十八。今号で業績や追悼文を掲載します。（編集部）

〈略　歴〉

◇1949年9月22日、岐阜県土岐市土岐津町高山に生まれる。
◇1968年、花園大学文学部仏教史学科入学。在学中に出家。
◇1972年、花園大学文学部仏教史学科卒業。（市川白弦と共に僧籍返上）
◇1973年、商社を経て、京都大学大学院文学研究科修士課程印度哲学専攻入学。
◇1975年、同大学修了。中部読売新聞入社。
◇1976年、退社。
◇1977年、中島康允主催、雑誌『遺言』（第3号から）編集に参加。
◇1983年、中島康允が急逝のため、『遺言』69号より編集を引き継ぐ。（102号終刊号まで）
◇1988年、愛知教育大学講師。（96年まで）
◇1994年、愛知大学講師。このほか日本福祉大学の講師など。
◇2005年、糖尿病により入院、以降療養。
◇2006年、『中外日報』「近代の肖像」欄に精力的に執筆。
◇2018年8月28日午前11時25分、心不全のため永眠。

〈著　書〉

◉資料集『内山愚童―大逆事件のイデオローグ』蚕の社、1976年
◉『大逆事件と内山愚童』JCA出版、1979年
◉編著『大逆事件の周辺』論創社、1980年
◉嶋田清次郎著『地上』全六巻復刻版（黒色戦線社）第一巻解説、1986年
◉『伊藤証信とその周辺』不二出版、1986年、
◉復刻『無我の愛』不二出版（解説）1986年
◉『千本始末記』海燕書房、1992年（左上写真）
◉『伊藤証信日記』（一）―（三）、私家版　1996年―2000年
◉『千本組始末記』平凡社、2013年

（作成…中川剛マックス）

柏木隆法先生と私

中川 剛 マックス

去る八月二八日、柏木先生の姉上様から「心不全で亡くなった」と訃報を聞いた。その日の夜も自宅へお邪魔するつもりだったので、とても驚いた。

私が先生に出会ったのは、家族でブラジルから引き揚げてきた頃で、三二年前の六歳の頃である。私の父と先生は、幼稚園からの竹馬の友で、帰国したばかりの一番上の兄が、高校受験の勉強を見ていただいていたのが縁である。私も中学から先生の家に出入りするようになった。その頃『千本組始末記』を執筆していたこともあって、よく京都の学生時代のことを聞いた。その一端は『Fukujin』№17（明月堂書店）のインタビューに掲載されている。純粋だった私は、京都に憧れを抱き、映画界と学生運動を目指して花園大学に入学した。気づけば、その伝統も立て看板もなかったことに愕然とした。唯一、祇園祭のアルバイトで、花園大学OBに「学生時代、着流しを常に着て、懐に大刀を突っ込んでいた奴がいた」という話を聞いた。その話を、先生に話したところ「まだ、そんな事を覚えている奴がいるのか」と恥ずかしがりながら笑っていた。

その後、私が峯尾節堂を卒業論文のテーマにしたのは、柏木先生が最後に主催した内山愚童を偲ぶ会がきっかけであった。その会でご一緒した峯尾の遺族の正木健雄さんの話で「峯尾の遺族の中にブラジルへ渡って、強盗に銃殺された」という話に何か身近なものを感じ、峯尾をテーマに選んだ。先生の蔵書を使い、指導も厳しかったが、何とか書き上げた。

大学を卒業して半年後、大学院へ進学を相談した時「葛野枯骨について調べろ」と一冊の冊子を渡された。『百姓礼賛』という題で、内容は社会主義とは関係のない法話だった。葛野は大阪・池田で侠客と共に借家人同盟を結成した僧侶で『千本組始末記』にも僅か一行しか記述されていない。私は京都で

引越屋のアルバイトをしながら、経験した事もない取材を行い『大逆事件ニュース』に発表させていただいた。

今思えば、根性があるか試されたのであった。以降も『トスキナア』『中外日報』等に書く機会を頂いた。この雑誌論文が評価され、大学院に入ることができた。大学院に入ってからはテーマを与えられることはなかったが、今考えると感謝に堪えない。

先生の間近にいた私は、何度も絶交の場面や教団との喧嘩を見ていただけだが、先生の資料や取材への思い入れから起因するものであった。私も三度、破門になっている。

教授の道を断たれた不運な事もあったが、晩年に菅原文太さんが縁で『千本組始末記』が平凡社で再版されたことは、先生にとって大きな喜びであった。近年は、ふたたび内山愚童について取組むなど、精力的に資料収集をしていた。亡くなって次の日に、宅配便で短冊が届いた。まさか、自身も亡くなるとは思っていなかったのだろう。ユニークな生き方をしてきた先生にしか書けないものが、もう読めないことを残念に思う。

柏木隆法さんの回想断片

小松隆二

長い闘病生活の後、柏木隆法さんが永眠された。その柏木さんを追悼する原稿をという依頼であったが、ちょうど仕事の関係で職場に置いていた本・雑誌・資料類を狭い自宅に持ち帰ったときなので、書籍・資料が乱雑を極めている。お蔭で署名入りで頂いた柏木さんの著作類や最後まで送り続けてくれた日々の感想・意見、調査や研究のメモ・覚書などを自由に綴った個人通信「隆法窟日乗」も取りだすことができない。そんななかでの追悼・回想記である。

柏木さんは守備範囲の広い人であった。それだけに、よく動く人でもあった。取材や資料の探索・収集のためなら、貧乏旅行も厭わず全国を飛び回っていた。私などはそのすばやい動き・広さにはついて行けず、彼のことで知っているのは限られている。得意の映画、侠客・暴力団・右翼、仏教、満州や朝鮮関係のことは一方的に教えられることばかりであった。僅かに思想家・思想運動のことでは、話が通じ、議論や論争をしたこともある。

柏木さんは、思想家でも大物や主流に位置する人よりも、十分に光があてられていない人によく注意を向けていた。例えば、大逆事件では、最も強く関心を向けたのは内山愚童であった。東京などでの運動よりも、箱根・林泉寺での愚童の追悼会に力を注いだ。また愚童の郷里・新潟県小千谷における記念碑建立運動には、大きな貢献を行っている。

また関心を抱き、部分的にメモ・覚書程度のことは発表しているが、未完に終わった仕事に、小田頼造研究がある。小田は山口の人であるが、無我苑、平民社にもかかわり、興味深い役割も演じている。個人誌流行の先駆けをなした一つ『創生』（1912年12月創刊、4号で終刊）の発行など執筆活動も個性的である。また平民社の人たちの他、西田天香、高田集蔵、江渡狄嶺、堀井梁歩など異色の人たちとの交流も忘れてはならない。柏木さんの得意な宗教関係でもキリスト教から仏教まで広く足を踏み入れている。

その小田については、柏木さんは誰よりもよく資料を集め、生涯の足跡や人物像にも深く立ち入っていた。にもかかわらず、小田という人はどの運動にもある程度以上は深入りせず、つまらないところが多いと、評伝の執筆にはそう気がのらない風であった。

しかし、柏木さん以外には、小田の評伝をまとめることのできる人はいない。小田の他にも、柏木さんしか深い研究のできない人物・テーマがいくつも残されてしまった。大変残念なことである。

柏木さんは喧嘩っぱやいところがあり、敵も少なくなかった。というより、一方的な判断で敵を作る人だった。もっとも、すぐにけろっとするサッパリした面ももっていた。

これからは天国で安らかに眠っていただき、中川剛マックスさんら後進の人のご健闘・ご活躍に期待したい。

（2018年12月）

【寄稿】ＩＷＷのライプツィヒ・ブランチの紹介

Wobbly

＊IWW：Industrial Workers of the World

ドイツ語圏のＩＷＷ（Glamroc＝German Language Area Members Regional Committee）の中でライプツィヒのブランチはより小さいブランチで、学生・学院生、または交渉しにくい不安定な短期雇用事情で働いている組合員が多いので、現在は「文化」活動や連帯活動が中心となっている。

ＩＷＷのライプツィヒ・ブランチの行動だけではなく、全体を把握するために、以下、過去1年間にGlamrocが行ったプロジェクトを紹介する。

＊

２０１７年にあった十月革命の１００年記念日に際して、「The future is unwritten」というライプツィヒの共産主義団体がその革命の政治的な遺産を反省しようとして、パネル・ディスカッションを開催した。そこでＩＷＷの代表人が現在と未来を鑑みて、資本制ではない社会を議論する、またはそういう社会を想像できるものにする政治実践が必要になるという立場を論じた。この実践は草の根民主主義や労働者の自己解放に基づくしかないので、この基礎は今建築するべきだ。

＊

ドイツ語圏でもＩＷＷは職場での問題や労働関係の問題だけではなくて、他の差別や勢力関係にも取り組んでいる。ライプツィヒでは性差別とフェミニズム、そして最近もっと具体的に親や母の状況がテーマになってきた。３月８日に我々は７００人と一緒に戦闘的な国際女性デーのデモに参加した。２０１９年にはドイツでも新たにインターナショナル・ウーマンズ・ストライキ（国際女性ストライキ）さえも開催する予定だ。このストライキでケアワークの悪い労働条件と低い賃金だけではなくて、無払い・目に見えない家事労働や家内のケアワーク、そして特にシングルマザーの貧困などの悪い生活条件、またはクィアの人々に差し向けている差別や暴力をテーマにする予定だ。これに関して、我々は当事者と連帯感を持っている第三者の片寄せ合いを強く主張している。５月に行ったGlamrocの戦略会議には、ケアワークというテーマを今後注視の的にすることが決まってきた。現在、ライプツィヒ・ブランチは他のブランチと合同して、職場での甚だしい弊害を世に問うたため元の雇用者に法的手段で脅迫されている同志労働者をGlamrocと一緒に支援しつつある。職場での組合活動とともにその弊害の告発が解雇の一つの焦点であったという。

詳しくは https://www.wobblies.org/（ドイツ語）

＊

その上、ＩＷＷは８月にアメリカの複数の刑務所に起こったプリズン・ストライキ（逮捕者のストライキ）を連帯的に支援した。ストライキの原因は、基本的に最悪の拘禁条件と人種差別的な法制度のうえ、逮捕者の生命まで危険に陥れる強制労働を通じての逮捕者の搾取でもある。「例えば、今夏にはそういう訓練のない逮捕者が壊滅的な森林火災の消火活動に働かされた。非自発的で、訓練なしで、$２（約２２５円）の時間給で。」（1）

ドイツの刑務所の悪い拘禁条件も批判しながら、ＩＷＷは囚人組合のＧＧ／ＢＯと無政府組合主義の労働組合ＦＡＵと一緒に８月21日に在ライプツィヒ米国領事館の前で抗議集会を行った。

詳しくは https://incarceratedworkers.org/（英語）

https://www.wobblies.org/solidaritaet-mit-gefangenenstreik-in-den-usa/（ドイツ語）

https://ggbo.de/us-gefangenenstreik-nimmt-an-fahrt-auf-solidaritaetskundgebung-auch-in-leipzig/（ドイツ語）

＊

ライプツィヒでも、ＩＷＷにとっても重要な話題は現在ロジャヴァ（2）で行われている戦争だ。ロジャヴァの中で平和・民主主義・自己決定を重んじる社会を構成する努力に対して、トルコのＡＫＰ政府が攻撃戦で現場の進展だけではなく、クルド人の人生そのものまで攻めている。

「女性解放」「エコロジー」「インターナショナリズム」「アンチ・レイシズム

と逃走」「平和とアンチ・ミリタリズム」という五つのスローガンを掲げて6月にライプツィヒでデモが行われた。参加者がロジャヴァに対して連帯を表し、トルコの攻撃戦とトルコへのドイツの会社の兵器輸出を抗議した。

ＩＷＷそのものがロジャヴァでボランティアとして闘った同志労働者を失ったため、その抗議に参加するのは闘い続けるクルド人に対しての連帯だけではなく、自分の同志に対しての敬意の表現でもあった。

詳しくは

http://rojavasolibuendnisleipzig.blogsport.eu/（ドイツ語）

＊

先日、ケムニッツで起こった極右の暴動が世界の注目を浴びた。市の祭りで起こった移民を背景に持つという数名の喧嘩後の現在まで複雑になってきたそうな刺殺事件がきっかけ、キューバ系ドイツ人という被害者がネオ・ナチスやレイシストの市民に「ドイツ人犠牲者」と謳歌され、同日の夜に難民や移民の背景を持っている人々が駆り立てたり、攻めたりされた。翌日の極右デモと、それに対抗した、ＩＷＷも参加したアンチ・レイシズムのデモの際に警察が対処できなかった。現在まで、自称自警団によるドイツ人に見えない人々に対して詰寄、暴言、暴力の事件もあったそうだ。

どちらの場合の検査も引き続きつつある。

とにかく極右主義やレイシズム・ゼノフォビアがようやく話題になって、比較的批判的に論じられてきた。

以上のすべての問題や、それ以外の問題の解決に向けた取り組みは、社会や我々の多様な生活に大切な役割を果すと我々は思っている。抑圧なしの生活や社会を実現するために、賃金労働内の搾取ばかりに集中することでは不十分だ。これ故に、革命を目指す包括的な組合活動の一環として、レイシズム、セクシズムなどに取り組んでいる。

〈注〉

(1) https://www.wobblies.org/solidaritaet-mit-gefangenenstreik-in-den-usa/

(2)「Rojavayê Kurdistanê」とはクルド語の言葉で、「西クルディスタン」と意味する。

緊急寄稿・韓国から

金子文子の韓国独立有功者認定について

金珍雄
（成均館大學校 史學科 博士課程）

今年11月17日、韓国政府から金子文子に独立有功勲章が追叙された（建國勲章 愛國章（四等級））。

自分の墓の前に同志たちが革命の花を咲かせてくれることを頼んだまま、自らこの世を去ってから92年になる。独立有功者の認定がどうしてこんなに遅れたのか。聞いたところによれば、叙勲申請はすでに2度ほど試みられたそうだ。脱落した理由を公開しないため、確信はできないが、彼女が〝朝鮮独立〟のために戦ったのか？　が問題になったと推測される。

私はアナーキズム独立運動を知りたくて大学院に進学した。そうして会ったのが金子文子だった。私は彼女が朴烈を愛して、ただ追従した人だったとか、虚無主義の実践のため命を捨てようとした女性ではなく、アナキストとして自分の意志の実践のため、最後まで闘争した人物として評価してみたかった。尚かつ、彼女が一人の独立運動家として認められたかった。それで研究の結果をまとめて、朴烈義士記念館名義で今年4月、独立有功者申請書を政府に提出した。折よく昨年、映画『朴烈』が公開されて彼女に対する関心が高まったし、政府でも〝女性独立運動家〟を積極的に発掘するという立場を発表したので都合がよかった。

追叙の結果を聞いて、最初はとびたつばかりに嬉しかったが、これは長くは続かなかった。もし彼女が生きていたら、勲章を拒んだかもしれないと思ったからだった。また、マスコミで、彼女が朴烈の妻だったことや幼い時の朝鮮での不遇な生活、それだけを報道しているのを見ながら、彼女の活動が単に〝朴烈の支援〟として固定されるのではないか、単なる〝民族主義者〟として認識されるのではないかが気になった。思い過ごしだろうか。兎に角、今年が終わる前に彼女のお墓の前に常樹木一本を密かに置いて来るつもりだ。あの青木のように無支配・無強権社会を作ろうとした同時代の人々の痕跡をもっと勉強し、より多くの人々に知らせたい。

【寄稿】高群逸枝と『麺麭の略取』

蔭木 達也

前号（本誌44号）に、平民社版『麺麭の略取』のことが出ていたので、それに関連した話をご紹介したい。それは、女性アナーキスト高群逸枝が所蔵していた平民社版『麺麭の略取』のことだ。

『麺麭の略取』は1909年に出版されたが、届け出るとただちに発禁となったため、発禁前に坂本清馬が各地に直接送ったものだけが関係者の間で出回っていた。この部数がいかほどであったかは定かでない。出版と発送に奔走した坂本によれば、製本を取りに行ったり、発送する作業が「数回つづいた」という。ほとんど一人で取りに行き、発送作業を行ったということであるから、数回で運ぶことの可能な分量は数百冊程度であったと推定される。「本は、非常に軽い、綿を引き延ばしたようなやわらかい紙に印刷した、厚さが二寸くらいの菊版の美しい書籍であった」と坂本が語るように、軽いわりにややかさばる本であった。一度に運ぶことができるのは、せいぜい数十冊であろう。発禁になり、出版の一ヶ月後に警察が押収したのはそのうち20冊程度だったという。ほとんどは、読者の手に届けることができたと考えてよい（坂本清馬「『麺麭の略取』刊行者としての思い出」『文庫』第103号、1960年4月、6―7頁）。

その後の『麺麭の略取』の流通であるが、当事者が語るところによれば、1921年には堺利彦の家に50冊ほど集められていたという。その年の3月ごろ、堺の家にガサ入れがあるということで、近藤憲二が『麺麭の略取』40～50冊ばかりを持ち出して秘匿した。それらはその後、新聞印刷工組合革進会を前身とする正進会と東京市内の活版工組合であった信友会の会員に配布されたが、1923年の関東大震災によってそれらはほとんど焼失してしまったということである（綿引邦農夫「パンの略取と正進会」①・②『無政府主義運動』第40号・41号、1962年7月・8月、いずれも1面。『復刻版　戦後アナキズム運動資料』3巻、緑蔭書房、1988年、93・95頁）。

さて、高群の蔵書していた『麺麭の略取』は現在、熊本市立図書館が所蔵しており、非常に状態がよいまま今日まで残されている。その現物をみると、驚くべきことに、扉に「T. Sakai」のサインがある。堺利彦が蔵書サインした『麺麭の略取』が、高群の手に渡ったとしか考えられない。しかし、高群に『麺麭の略取』を譲ったのが、堺利彦であったとは考えにくい。堀場清子の詳細な調査においても、高群と堺の間に何の関係も明らかになっていないからだ。高群にこれを渡したのは、近藤憲二か延島英一のように思われる。

近藤憲二は1928年以降平凡社に勤める。平凡社には高群の夫橋本憲三も以前勤めており、高群自身も執筆活動の中で創業者の下中弥三郎と関わりがあった。近藤は堺の家から50冊程度『麺麭の略取』を持ち出したとされるが、一方で正進会に配布されたのは十冊余りだったと綿引は語っている。信友会もそうだったとすれば、近藤の手元にはまだ数冊から数十冊の『麺麭の略取』が残されていただろう。その中には堺が蔵書サインした『麺麭の略取』が交じっていて、それが高群の手に渡ったのではないだろうか。しかし、近藤と高群との具体的な接点が判然としない。

延島英一はもともと活版工で、信友会に長くいて中核的な役職も担当したから、会に配布された『麺麭の略取』を手に入れていてもおかしくない。『婦人戦線』同人の松本正枝の夫で、高群と恋仲にあった時期もあったほどであったから、高群に本を渡す機会は少なくなかっただろう。しかし、そうなるとなぜ「T. Sakai」のサインがあるのか不明である。信友会に配布されたものにも堺のサインがあったのか、あるいは全然別の同姓同イニシャルの人のサインなのか。

いずれの説に立ってもやや疑問が残るところであり、真実は不明である。

余談だが、『通信』第2号（本誌2号）で「延島英一」の蔵書が日本近代文学館に寄贈されたが詳細不明、という一報が載せられている（8頁）。日本近代文学館に延島の蔵書はないが、同じ『農民』同人だった鑓田研一と犬田卯の蔵書が寄贈あるいは寄託されている。膨大な量なので、おいおい論文にしてどこかで紹介するつもりである。

書評『寺島珠雄書簡集・石野覺宛』（亀鳴屋）

河内　紀

ほんの少し前のように思っていたけれど、寺島珠雄さんが亡くなったのはもう20年近く前――。その寺島さんの記憶を忘れず懐かしむ人たちがいて本を作った。郵便はがきを一回り大きくしたくらいのサイズ、上着のポケットにすっぽりと収まってしまう、軽くてふんわりした手触りのよい本だ。

内容は、寺島さんが金沢市に住んでおられた詩人・石野覺さんに宛てたはがきと封書を合わせて百通あまり。年代は1973年の年賀状から1999年4月まで。石野さんは『寺島珠雄詩集』を自らの手で編纂刊行（1985年）したこともあるひと。寺島さんから届いた書簡を石野さんは大きなあられ煎餅の缶に入れて保管していたという。

たくさんの手紙たちが煎餅の缶からあふれ出してきたように重なりあっている写真が、目次の隣に載せられている。寺島さんの手づくりとわかる再生封筒も見える。裏白の広告チラシを使って作成された封筒には、律儀に郵便番号用のゴム印も押されていて、市販のものとまったく変わりがないようだが、でも、やっぱりこれは寺島さんのモノ。

なかみだけではなく、それを包み込んだ封筒も一緒に保管していた石野さんの気持が伝わってくる。そして、そのなかみから伝わってくるのは、差出人・寺島さんが全身で受け止めてきた《もの》《ひと》《とき》。それは、記録であると同時に詩になる前の詩（ことば）でもある。

「今朝は先日拝領の石川コシヒカリを初炊き、大杉の日でもありますから大兄とも閑談したくなりました。いま午前八時です。…（略）…四時十分朝刊来（読売）。朝刊をよんでから米をとぐ、納豆のネギを刻む、大根をおろすなど。五時半フロへ出発、任意なコースを遠回りして六時開店には一番乗り（連日）。六時四十分帰着。七時十五分電気ガマにスイッチ。…（略）…めしは煎茶めしにして（いま保温に切り替わり）塩ひとつまみ。うまいのが食えると思います。みそ汁は大根の中抜きの葉とウスアゲです」（官製はがき）。

銭湯で朝風呂、電気釜にスイッチ。湯気のなかに大杉栄の姿が漂い、やがて、煎茶めしとみそ汁の香り。消印は1994年9月16日。

「素材を得てから丁度二週間で詩を一つ書いておとといのこと。…（略）…いま五時十五分、この手紙を終わったら風呂行きとなります。即ち途中で投函です。詩が書けた日に、路傍の魚屋で生きているハゼを買い、これを煮付けて、最高だ！　と喜んでおります。大きな卵持ちも含めて十二、三尾だったでしょう。今朝で終わりです。その値段八百円也、いまの時代として安い買いものと思いませんか」（封書／1996年2月27日消印／月の輪書林の書籍小包専用封筒を裏返して使用）。

郵便投函経由・銭湯の朝風呂は十年来のコースだった。

年度不明分を除くと、亡くなった1999年の書翰は三通。4月20日消印のはがきが最後となっている。その三ヶ月後の7月22日午前11時35分まで、寺島さんは生きた。73歳。

書簡集の最後のページに掲載されているのは、石野宅の玄関先写真。ドアの前には、新聞配達兼用だったのだろう、大きめのしっかりした郵便受けが写っている。

差出人、受け取り人ともに亡くなってしまったが、百通あまりの手紙は亀鳴屋主人・勝井隆則さんの手で、再び、新しい読み手のもとへと届けられることになった。あられ煎餅の缶のお陰でカリッと湿りっ気なしに保管されて。

＊発行所・亀鳴屋（金沢市大和町3―39）限定493部（2000円＋税）。

国内ニュース

パリ五月革命等から50年。新たな運動を考えるシンポ

11月23日、「『パリの5月革命』『プラハの春』から50年　朝鮮半島と世界のパラダイムシフトを問う　11・23シンポジウム」という興味深い集会が開催され、都内の「スペースたんぽぽ」には50名を越す人々が参加しました。主催は同実行委員会です。まずは司会の津川勤さん（差別・排外主義に反対する連絡会）が「私は80年代に山谷で活動していましたが、当時感じることができた革命というか直接行動のリアリティがなくなって久しい。これを問題意識として今日の集会にコミットしたい」と挨拶。続いてメインゲストの鵜飼哲さん（一橋大学教員）の講演では貴重な60年代のフランス街頭闘争の映像などと共にパリ5月革命におけるアナキストや毛（沢東）派、シチュアシオニストなどの動きを紹介。話は時代を超えてポピュリズムやネオリベラリズム、更には反イスラムに傾斜した「シャルリ・エブド」紙に関するものまでに及びました。中でもアルジェリア独立とその後を巡る諸々の事象、人物像（ファノン、鈴木道彦、不可視委員会等）の興味深い話が参加者を魅了しました。その後、原隆さん（NO-VOX Japan）からは「運動の側もパラダイムシフトが必要。異論を認めないあり方ではもう駄目です。権威主義やセクト主義を乗り越え、超党派・無党派主義という多元主義のプラットフォームを作りましょう」との提案がありました。続く草加耕助さん（ジグザグ会）は「私は80年代の学生時代、韓国民衆や三里塚農民のために命を懸けようと思い活動しました。でもそれでは何年かしか持ちません。バカバカしいやり方だと思われても、みんなそれぞれの自由なやり方で粘り強く闘いましょう」と発言。最後は司会も加わり討論と質疑応答になりましたが、その中で1998年にアナキストが企画した「パリ5月革命」シンポとそれに関する故山口健二氏の文章が肯定的に取り上げられたのが印象に残りました。

（山口智之／写真提供　ジグザグ会）

《集会報告》激動の1968年を検証する―無党派運動の誕生

『東大闘争の語り―社会運動の予示と戦略』という著書を今年出し、聞きとりという手法で六八年を再現し、紙の資料のみに依拠した小熊英二の六八年運動批判に納得できなかった人々に、共感できる六八年像を提示した小杉亮子さん、現代美術を美術運動を主軸に考察し、『メディアと活性』、『半島論』などという本に関わっている細谷修平さん、この二人の三十代半ばの登壇者のおかげか、東京古書会館での最近のアナ系のイベントとしては平均年齢がやや低くなり、女性の比率もやや高かったような気がする11月10日の集会は、実行委員7名を含めたら軽く90名を越す盛況で、二次会も30名近く参会したようだ。

『極私的60年代追憶―精神のリレーのために』など多くの著書を持つ太田昌国さんの、60年代の運動を体験し、その時から一貫して党派的運動とは距離を置きながら運動を持続して、それを常に世界的視野を持って把え返している語りは、若い二人の登壇者とは一味違う説得性のあるものだった。

小杉さんの予示的と戦略的という運動の弁別は、政治的な革命を直接志向するか否かと関係するのだろう。当時「マルクスなんて知らないよ」と言いながら闘った日大やその他の大学の全共闘的学生（無党派）の多くは、自分た

ちの学内での学園闘争が政治革命に直結するとは想定していなかっただろう。

質疑応答の中で出た女性問題やセックスの問題も、いわば文化革命的な課題なのだろうが、それを可視化したのが60年代の運動だとは言えるだろう。それにしても太田さんが言うように「論理も倫理も喪った世界的な文脈」の中で、私たちはどうすれば良いのか、現在もまだ検証せねばならないことが多すぎるようだ。

（南島治朗）

「コスモス忌」報告

11月24日、築地本願寺本堂内講堂で詩人の秋山清氏を偲ぶ第三十回の「コスモス忌」が参加者約90名で開かれた。第一部の講演は奥沢邦成氏の司会で、原満三寿氏による「俳人・金子兜太の戦争」だった。原氏は俳句、詩と幅広く活躍されているが、俳句では78年に同人誌「海程」に参加。「海程」が兜太の主宰誌になった85年に退会し、2015年に三十年ぶりに兜太との通交が復活したという。兜太は海軍主計中尉として43年トラック島夏島に赴任し、終戦後は捕虜生活を経て46年11月に帰国した。「水脈の果て炎天の墓碑を置きて去る」はよく知られている。帰国後日銀に復職。「湾曲し火傷し爆心地のマラソン」は長崎支店時代の傑作だが、原氏は表題の〈戦争〉は太平洋戦争ばかりでなく、兜太にとってのあらゆる戦争であるとし、副題の〝運動体から存在体へ〟を基軸に、兜太への洞察にあふれた分析を展開された。

兜太は70年代に「俳句造型論」によって前衛俳句の旗手と目され、「海程」を率いて俳句界を牽引し俳壇の保守返りに警鐘を鳴らし続けてきた。晩年は運動体から存在体へとシフト。一茶に共鳴し、故郷、秩父の産土と一体となって、あるがまま、そのままに生きる「存在者」を標榜し、最晩年には時代への強い危機感から、「アベ政治を許さない」の揮毫に象徴されるような反戦への強い抗議行動を示した。秩父への帰還を願いつつも、一方で、それに安住することなく反戦平和の行動を実践していったのは、戦争体験や日銀での冷や飯などをはじめとする様々なルサンチマン＝戦争が兜太の生のエネルギーだったからだ。

俳句は即吟に転じ、メッセージ性の強い作品が多くなったことが惜しまれるが、辞世の句である「河より掛け声さすらいの終わるその日」にいたって、ようやく産土、秩父との交歓を果たしたとしめくくった。

第二部の懇親会では、乾杯の音頭を西杉夫氏、閉会の挨拶を小沢信男氏が行った。

（皆川 燈）

その他のイベント開催報告

◉11月23日、報告会［革命の地下水脈：スペイン、２０１８年の協同と共同］、講師、高橋厳…司会、奥沢邦成（東京新宿三丁目カフェ・ラバンデリア）参加者20人前後。◉11月25日［終わりにしよう天皇制２０１８・11・25大集会＆デモ］、講演・栗原康、そのほかコント、演劇、歌、アピールなど（東京原宿千駄ヶ谷区民会館）イベント終了後に会場から原宿駅前、渋谷駅前を通って宮下公園のあたりで解散というデモ。集会参加者は１７０人。デモは、それから年長者が少し抜け、20代、30代が少し入って１５０人前後ぐらい。講師栗原康、２日前の講師鵜飼哲も参加していた。警察側はその２～３倍ほど。右翼の街宣車は、憂国忌当日にも関わらず10台は軽く越していた。（川口秀彦）

海外ニュース

スペイン、マドリード混乱するＣＮＴ

ＣＮＴ―ＡＩＴが国際労働者協会（ＩＷＡ―ＡＩＴ）から除名され、今年新たなインターナショナル（ＩＣＬ―ＣＩＴ）の設立に参画したことは前々号でお伝えしたところである。しかし、ＣＮＴの混乱は現在も続いており、収束する様子が見えてこない。

10月27日、ＣＮＴの地方総会がビリャベルデ地区の事務所で開催され、マドリード地方連合の五百人以上のアナルコサンジカリストが除名されることに

なった。また、同日、地方総会が開催されていた最中に、ティルソ・デ・モリーナにある歴史的事務所の六階をＣＮＴ労組のメンバーが襲撃し、事務所を守ろうとした二人の女性がけがをした。

詳細は、以下のサイトを参照（英語）：
https://newworldinourhearts.blogspot.com/2018/10/new-round-of-purges-in-cnt-cit.html?q=CNT-CIT

十一月十七日にＩＷＡ―ＡＩＴ事務局が出した声明文は以下を参照（英語）：
https://iwa-ait.org/content/solidarity-cnt-local-federation-madrid

米国、カリフォルニア州ノース・ヴァレー相互扶助へ

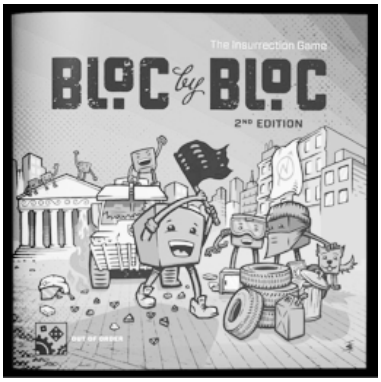
カリフォルニア州北部で大規模な山火事が起こったことはメインストリームのメディアでも報じられている。アナキズム系出版社のＡＫプレスもこの近くのチコという町にあるが、無事だったようだ。この山火事に対して、「災害救済相互扶助」（ＭＡＤＲ）という全国ネットワークが示した価値観に基づき、「ノース・ヴァレー相互扶助」が立ち上がり、活動している。

「ノース・ヴァレー相互扶助」への寄付は以下を参照（英文）：
https://www.gofundme.com/north-valley-mutual-aid

「災害救済相互扶助」（MADR）については、以下を参照（英文）：
https://mutualaiddisasterrelief.org/

お正月は、暴動ゲームで

「ブロック・バイ・ブロック」（Bloc By Bloc）というボードゲームの第二版が発売された。プレーヤーは二人から四人。それぞれが労働者・学生・近所の人達・囚人といった革命家を使い、都市の街路で国家と戦うゲームである。時間切れになって軍隊がやってくるまで



に、バリケードを築き、機動隊と衝突し、地区を占拠し、ショッピングセンターを襲撃して都市を解放するのだ！

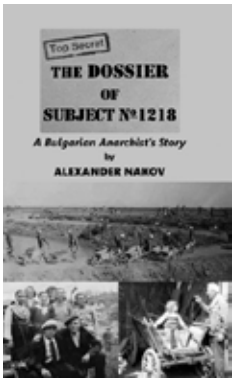
詳しくは、アウト・オブ・オーダー・ゲームズ社の以下のサイトで（英語）：
https://outofordergames.com/blocbybloc/

（以上、翻訳・編集：森川莫人）

〈訃報〉ブルガリアのアナキスト、アレクサンダー・ナコフさん

１９１９年、貧しい家庭に生まれ、早くから家族を助けて働いていたナコフさんは、１９３７年、スペイン社会革命の影響を受けてアナキストとエスペラントのグループで活動を始めました。若い時代を独裁と第二次世界大戦中のナチズムの嵐の中で過ごし、ナチからの解放後はスターリン主義者収容所で過ごしました。恐怖の収容所から生き残った少数者です。２０１８年11月11日、99歳のナコフさんはブルガリアのペルニクでその生涯を閉じました。

ブルガリア語で最初に書かれたこのナコフさんの回想録を、英語版から日本語に翻訳した抜粋で、２０１９年、本通信においてご紹介します。（杏藤 紫）



Black Cat Press から刊行中の英語版（右）、ＣＮＴサイトでも訃報記事を掲載（左）

書評『農本主義のすすめ』（宇根豊／ちくま新書）

高橋　巌

本書の筆者・宇根豊は、福岡県の農村で、近代農法を普及する農業改良普及員だった人物である。宇根は当時、生産性向上のため農薬・化学肥料を多投し、虫たちを一網打尽にして環境を無機化する農業改良普及所の指導に疑問を呈し、「虫見板」を活用しながら圃場で虫たちを観察し、必要以上に農薬散布を行わない「減農薬運動」を提唱した。このように宇根は、普及員当時から、規模拡大と生産性向上を進め自然との共生に反する農政に疑問を持ってきたが、39歳で自ら新規就農して「百姓」になり、現在、有機農業の分野で様々な問題提起を行っている。宇根は、「（自ら百姓になり初めて）農の大切なもの」を「体でつかんだ」という。それは、「農とは人間が天地と一体になること」という「農の本質」であったが、そこでそれを語った「農本主義者」に思いを馳せたという。

農本主義者。評者自身の理解は浅いが、戦前期日本におけるファシストの代名詞のように語られ、「進歩的」マルクス主義者からは蛇蝎の如く嫌われた彼ら。しかし、ここ30年来、久保隆の権藤成卿の分析など先駆的研究により多角的な評価が行われてきたことは、周知のとおりである。本書は、実際に農を実践する、農の内部の立場からの「農本主義のすすめ」である。

宇根は、橘孝三郎の「農は資本主義に合わない。なぜなら天地自然を相手にしているからである」「人間は、農を本として受けることなしに生存できなかった」という言葉を引き、農の大切さとともに、「農の本質は資本制生産様式とは合致しない」という農本主義の思想を解説していく。そして、農本主義がファシズムの体現とされたことについては、それを唱道した丸山真男を、農本主義の「自治主義」を無視し「在所（農村現場）では国家に対峙した反体制運動だった」側面を否定する一面的理解で、それは「農本主義を百姓の視点から見る見方がなかった」ことに起因すると批判する。しかしそれ以上に、高度経済成長という「近代化精神を物欲として追求する資本主義的価値感の猛威」「農業を経済価値に置き換える思想」の前に「敗北を期した」としている。

しかし、１９７０年前後からの有機農業運動や公害・環境破壊への抵抗などによって、「農とは食料生産だけでなく、天地自然に支えられ、同時に天地自然を支える営み」という農本主義的理解がようやく復権し「静かに広がって」きたという。その上で、経済成長によっても決して人びとの生活満足度は向上していないこと、科学的合理性だけで農の世界は捉えることができず、それはまた、人間の生業そのものの本質を示すものであると説き、「生産性」「所得」「ＧＤＰ」「投資」など経済概念の矛盾とむすびつけながら、未来を構想していく。それはすなわち、人口は減ってもより農に関わる人は増え、地域での食とエネルギーは有機農業と再生可能エネルギーにより自給され、競争ではなく協同する地域社会である。ここに我々は、かつて石川三四郎が描いた「土民」の現代版をみることができる。

本書は、宇根自ら冒頭で語るように、思想体系としての「農本主義（者）」の解説書ではなく、宇根の「農本思想」をかつての農本主義者を引きながら展開するものである。石川三四郎らかつてのアナキストの構想を想起させる箇所もあるが、宇根自らの「農の体験と理解」の中で語られるため孫引きではない独自の領域に昇華させている。

今、安倍晋三という自称愛「国」者が、ＴＰＰや日欧ＥＰＡ、種子法廃止などで、農を解体に導こうとしている。そればかりか、「水道民営化」によって、水すらも金に汚れた外資に売り飛ばし、一方で海外から新たな「小作人」を「輸入」し搾取せんとしている。

本書を通して、今の「日本国」のおぞましい社会や政治経済と対極の「我々自らの未来」を構想するため、是非一読を勧めたい。

書評『アナキズム』（栗原康／岩波新書）

高橋幸彦

映画「菊とギロチン」を見てから、「やるならいましかねえ、いつだっていましかねえ」という言葉が頭から離れません。「やるならいましかねえ」はよくあるいいまわしですが、「いつだっていましかねえ」と続くと意味あいが変わります。機を見るようなニュアンスが消え、迷いを一切ブッタ切るいさぎよさになる。いいね！

真っ黒なカバーに「人生は爆弾である　正しさをぶちこわせ！」というドデカイ見出し。「マジ？　これ、本当に岩波新書ですか？」

栗原康さんの新著「アナキズム」は、型破りになるとは予想してましたが、ここまでとは思いませんでした。

テンションの高い文体で繰り返し主張されるのは、「石を投げろ、火をつけろ」「暴走に暴走、そしてさらなる暴走」「現にあるものをぶちこわせ」「自分自身にですら制御できない得体の知れない力を解き放て」などなど挑発的な言葉の数々。

「アナキズムにやっちゃいけないことなんてない。」「ここが新天地でなければ、新天地などどこにもない。」「よりよくなるはクソ食らえ。アナキストはムダがいのち」「やることなすこと根拠なし」「全身全霊で大失敗」。読み終わった今も、これらの言葉たちが頭の中をグルグル回ってます。

一見、暴論・極論に思われるこの本に、私も最初は違和感を覚えました。必ずしも論理的とは言えない記述についていけなかったのですね。しかし、読み進めていくうちに、要所要所に使われているこれらの言葉が頭にこびりついて離れなくなってゆきます。なぜだろう？

歴史に名を残すアナキストたちは、自由を求めて、ためらわずに行動してきました。世のあらゆる束縛やタブーに挑戦する、率直で果敢な彼らの行動に、私たちは魅了されあこがれたのではなかったか。行動は多くが非合法でしたから、やがて徹底的に弾圧され、ほとんどが惨憺たる失敗・敗北に終わります。その結果、アナキストの行動は単なる暴力的な破壊活動であり、アナキズムは「建設的なビジョンを欠いた野蛮な思想」として批判・排斥されてきました。アナキスト側も、社会や組織のあり方や経済のしくみなどを一生懸命考え、テロや暴動などを戒めるようになります。アナキズムは「暴力・破壊の思想」から、健全な「社会主義の政治思想」になろうとずっと努力してきたんですね。

しかしその「社会主義の政治思想」が、かつての魅力を失って久しい。政治的な戦術論や机上の学術理論ばかりの社会主義思想は、現に生き辛さを感じている人々からその偽善性を見透かされ、今や嫌悪や憎悪の対象にすらなってしまっている。

アナキズム思想も、健全な社会主義化の過程で「あれはダメ、これもダメ」「やっちゃいけないこと」ばかりを強調する、他の社会主義思想と変わらない偽善的な思想に見えてしまっているのかもしれません。

アナキズムの原点は、やはり何ものにも束縛されない絶対自由の精神ではないでしょうか。常識や秩序・束縛から逸脱することによって、自分の可能性に気づくことができる。「それまで自分ができないって思っていたことができるようになる、あれもできる、これもできる」と感じられるようになる。

「いまやる」ために必要なのは、自分自身を縛るあらゆるものから自由になること、「絶対自由の精神」、今はそれだけでいいのではないでしょうか。

最後に、この本の「おわりに」から引用します。

「アナキストがやってきたことって、そのつど人間の可能性の幅をひろげてきたことだからね。どんなに国家がきびしいとりしまりをしたとしても、ひとはここまで自由奔放に生きることができたんだ、ここまであばれまくることができたんだとか、どんなにカネ、カネっていって「カネによる支配」がすすんだとしても、ひとはここまで、はたらかないで、たらふく食べることができたんだ、ここまでカネがなくても好き勝手にやれたんだとかってね。できっこないことをやらなくちゃ。その幅をいけるところまでひろげていく。それがアナーキーを生きるってことだ。」　いいね！

連載（17）反原発・裁判の現場Ⅲ

国を相手に一人の市民の闘い
差し止め裁判、新たな展開
主題は憲法論争

武智　忍

こんだけ事故った日本で原発がなくなんないわけだからね。狂ってるぜ

栗原　康

原発立地県、福井地裁で興味ある裁判が始まっている。

高浜・大飯の三、四号機運転差し止めを求める訴訟なのだが、主題はかつてのように地震動の過小評価を問う科学的な論争ではない。

原子炉の規制そのものに対し、その法律が憲法に沿わない、つまり憲法違反の疑いがある。とするラジカルな憲法論争である。

被告は法務大臣。さらに処分行政庁、原子力委員会。

原告は福井の一人の市民。県下で印刷業を営む松田正氏（六十九歳）。

二〇一五年、仮処分裁判で全国で初めて原発を止めた。その時の申立人の一人である。

近ごろゲンキな団塊世代。怒れるシルバーの一人、というわけだ。

＊

昨年の秋。伊方三号機の「仮処分抗告審」で住民側が敗訴。これでフクシマ以降、仮処分裁判で止められていたすべての原発が再稼働された。

二月にも大阪地裁で大飯三、四号機を巡る別の仮処分の決定が出るのだが、これは決定前になって裁判長が代わったーという悪例の一つだから「結果」を待つに及ばない。

二〇一六年には、すべての原発が止まっても電力は足りている現実を明らかにした。さらに重要なのは、原発は国会以外でも止められるのだ、という希望を多くの市民に与えた仮処分裁判だが、ここで一区切りになりそうだ。

＊

原発訴訟は新たな局面に入っている。

「裁判は、一人でも闘うことができる。民主主義社会の安全弁のようなものだ」（映画「日本と原発」キャンペーン）と主張する河合弘之弁護士の声に耳を傾ける。

選挙は多数派が権力を握る。しかし、法廷は少数派が一人でも異を唱えることができる。それが保証されているシステムだからーというわけだ。

原告が一人、という原発訴訟には先例がある。反・原発活動の先駆者、故水戸巌氏の未亡人、水戸喜世子さんがすでに大阪地裁で起こしていたからだ。

しかし、水戸さんは法定代理人、すなわち弁護団を伴っていた。

松田氏は本人訴訟。

弁護士抜きの「丸腰」の挑戦なのである。事情を知る弁護士はこんなエールを送る。

「本人訴訟は、いわば個人によるゲリラ戦。争点を私たちと同じ憲法論争に絞っているし、注目に値する頼もしい訴訟です」

松田氏のゲリラ戦、次回の審理は一月九日、一時半。雪の北陸路に、熱い法廷闘争が続く。

＊

戸田三三冬さんに続き、柏木隆法氏の急逝と、昨年は訃報が続いた。

柏木氏との交遊は、彼が師（市川白弦）に出会った京都時代からの長い歳月にわたる。

シャイで傷つきやすい性格。それを押し殺してのタフなふるまい。妥協を許さない一本気。それらはしばしば周囲との衝突を生んだ。

二〇一〇年、大阪での「大逆事件一〇〇年」の集会では、約束より早く会場に現れた。聞くと、

「じつは今日のパネリストの一人とケンカ別れをしている。だから居づらいのだ」と、明かす。

そんな気弱な一面があり、約束したかぎりは顔を出す、という少年のように律儀な側面も。柏木氏はそんな両面を気質として抱え込んでいた。

一時、日本刀の鑑定に本腰を入れていた。岐阜は刀工、関孫六ゆかりの地。深夜、一人の部屋で日本刀の青い刃先を見つめている。そんな陰のある光景が氏には似つかわしく思ったものだ。

キレイごとの追悼記は、彼には似合わない。

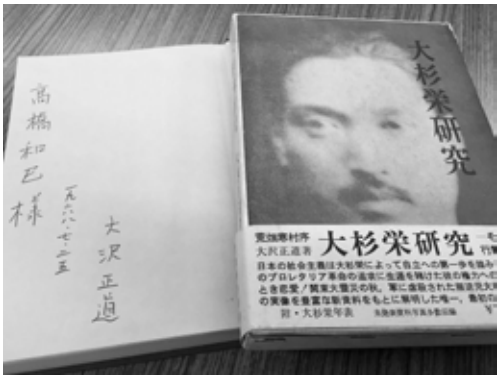
故・柏木隆法氏（右）　左は弟子の中川剛マックス氏

〈第四回〉古本屋オヤジの旧書紹介
『大杉栄研究』高橋和巳宛献呈署名本

川口秀彦

大沢正道著『大杉栄研究』（一九六八年、同成社）は、アナキズムに関心を持つ人にはとりたてて珍しい本ではない。今回紹介するのは、初版刊行直後の六八・七・二五という日付まで肉筆で書き入れてある大沢さんから高橋和巳宛の献呈署名本である。

四十歳になる寸前に七一年に病死した高橋が、六十年代後半に青年・学生たちに、三島由紀夫と並ぶほど多くの



読者を持っていたことは、現在の五十代以下の人たちには判ってもらえないだろうが、青山葬儀場での葬儀には三千人の参列者があったという話があるほどの作家だった。大学闘争のただ中にあって学生たちの追及に大学教員として真剣に応じようとし、個人、個人と個人、個人と集団の関係を考え続けて、党派や宗教や善悪の問題を作品化していた高橋の姿は、自己否定という言葉に行きつくようになった、少なくない若者たちには先行者にみえていたのだろう。

作品や評論などでもアナキズムへの関心を明らかにしていた高橋は、敬愛する先達の埴谷雄高を通じて秋山清や大沢正道と知りあっていた。この本はその証拠の一つでもある。この号の編集会議の折に、私がまったく忘れていた話を奥沢邦成さんがしてくれて、そんな話があったのだと思い出したのは、高橋のアナ連加盟希望を、秋山さんたちが止めていたという件である。日本アナキスト連盟の解散は、この本の出た六八年七月の四ヶ月後、六八年十一月。アナ連が運動実態がなく、あるいは名ばかりの組織であって存続が危うくなっているのを、秋山さんたちは承知していて、有名作家で、しかも病身の高橋を失望させまいと待ったをかけていたのだろう。奥沢さんが半ば忘れていて、私がはっきり覚えていたのは、高橋が、アナ連の後継団体のような麦社の構成員（麦社では組合員と呼んでいた）になっていたことだ。奥沢さんも私も麦社の運営委員として会計を担当したことがあるのだが、高橋からの組合費の振込用紙を見たことがある。そこには「病身なので、組合費以外の協力ができなくてすみません」みたいな一文があったと覚えている。自分の知名度を麦社運営に役立ててもらってもかまわないというような高橋の姿勢に、その時は感心したものだが、あの振込用紙は今どこにあるのだろうか。もし出てくれれば当然文献センターに収蔵してもらうことになるだろう。

大沢さんのこの本は、同成社版の元版は函入のA5判の上製本だが、索引を増補した法政大学出版局版が三年後の七一年にA5判並製カバー装として出版されている。古書としては同成社版が沢山出まわっているのは、六十年代末の読者が、初めてのまとまった大杉論として待ちのぞんだように購入したためかも知れない。六十年代後半の運動が一段落してから出版された法大版は、大沢さんは増補した分、元版よりはかなり良くなっていると自ら推奨しているのだが、運動の熱量の低下に見あって売れた部数が少ないのではないだろうか、古本としての流通量は元版よりは少ない。しかも、古書価は法大版がやや低目に設定されているようで、内容と古本人気が一致しない例の一つとなっている。

高橋の妻で作家の高橋たか子は、和巳が明大助教授から京大助教授として京都に帰ったときにも鎌倉に残るほどの鎌倉好きらしい。そのたか子に気に入られた鎌倉の古本屋が、和巳宛、たか子宛の献呈署名本を長く預っていて、たか子の希望通り、和巳宛の本は和巳没後三十年、たか子宛の本はたか子没後にやっと商品化するという、たか子の信頼を裏切らない商売ぶり、さすが鎌倉の老舗である。私とは、三十二年前の神奈川古書組合の同期の理事以来のつきあいで、大沢さんの本は分けてくれたが、もっと商売になりそうな埴谷さんからの献呈署名本はしっかり自分で売っていた。そこもさすがである（秋山さんからのものは分けてもらった）。

お知らせ・報告など

イタリアA誌が戸田三三冬さん追悼、略歴を掲載

本誌42号に掲載した戸田三三冬さんのプロフィール（『日本アナキズム運動人名事典』のために田中ひかるさん、櫻田和也さん、松本勲さんらによってまとめられた一文）がイタリアのアナキズム雑誌「A」に掲載。このほど、プロフィールをイタリア語に翻訳してくださった北川眞也さんを通じて、同誌編集部から当センターに献本いただきました。

当センターにアナキズム蔵書を寄贈

「大阪・おぢん」様より、アナキズム系の書籍100冊以上をリストと合わせて寄贈いただきました。深く感謝申し上げます。大杉栄、辻潤、石川三四郎、秋山清、バクーニン、クロポトキンなど、アナキズムの基本書とも言えるものも多く、センター蔵書と重複しているものもありますが、傷んだ本との交換や今後東京や富士宮以外に設置したい図書室（支所）での蔵書にしたいと思っております。

出版情報

【書籍】

●『アナキズム―一丸となってバラバラに生きろ』栗原康著　岩波新書　九二九円　二〇一八年一一月刊

●『革命とサブカル―「あの時代」と「いま」をつなぐ議論の旅』安彦良和著　言視舎　二三七六円　二〇一八年一〇月刊

●『新編 大杉栄書簡集―一九〇四年から一九二三年』大杉豊編　土曜社　一九九八円　二〇一八年一〇月刊

●『歴史からの黙示―アナキズムと革命（増補改訂新版）』千坂恭二著　航思社　三八八八円　二〇一八年一〇月刊（解説：松田政男・山本光久）＊同書を航思社様より献本いただきました。感謝申し上げます。

●『社会改革のための貨幣上の諸提案―ゲゼル、ソディ、ダグラスの理論と実践』マーガレット・G・マイヤーズ著　結城剛志訳　ぱる出版　二五九二円　二〇一八年一〇月刊

●『山崎今朝弥―弁護士にして雑誌道楽』山泉進・村上一博編著　論創社　三〇二四円　二〇一八年一〇月刊

●『乙女たちが愛した抒情画家 蕗谷虹児』鈴木義昭著　新評論　二三七六円　二〇一八年九月刊

●『底ぬけビンボー暮らし』松下竜一著　講談社文芸文庫　一八三六円　二〇一八年九月刊（「松下竜一」は『人名事典』増補改訂版で立項）

●『文明の恐怖に直面したら読む本』栗原康・白石嘉治著　Pヴァイン　一九四四円　二〇一八年八月刊

【雑誌・ブックレットほか】

●「激動の一九六八年を検証する―無党派運動の誕生」（二〇一八年一一月一〇日、東京古書会館で開かれた集会のパンフ）五〇〇円　古書りぶる・りべろ（東京・神田）にて取り扱い中。

●「特集　秋山清、没後30年を記念して」『季刊びーぐる　詩の海へ』澪標　一〇〇〇円　二〇一八年一〇月刊（論考：秋山雁太郎、小沢信男、久保隆、暮尾淳、添田馨、山田兼士、アンケート：奥沢邦成、季村敏夫、倉橋健一、黒川創、黒川洋、坂井てい、平居謙、細見和之、細江朋子、四元康祐。秋山清の作品抄、著作一覧、略年譜も含めた五八頁の大特集！）

●『残（のこ）の島』（演劇パンフ）劇団朋友　二〇一八年一〇月刊（協力：アナキズム文献センター）

●新連載「革命に至る極貧生活（第一回　家探し）」森元斎著（『文学界』一一月号　二〇一八年一〇月刊）

●「〈観念〉の力」山本光久著（『知的インフラ通信　ガラガラへび』二三八号　ぱる出版　一〇〇円　二〇一八年九月刊。『歴史からの黙示』〈千坂著〉に言及）

●『ニューズレター フロム ザ 自由労働者連合』二〇一八年秋（一七）号　三〇〇円　二〇一八年九月刊（連絡先：五四〇―〇〇三八　大阪市中央区内淡路町一―三―一一シティコープ上町四〇二号室　市民共同オフィスSORA気付 自由労働者連合）

映画情報

金子文子と朴烈の愛と闘いの物語を描き、映画祭5冠を達成するなど昨年韓国で大ヒット、日本では3月の大阪アジアン映画祭でオープニング上映（同映画祭では『朴烈　植民地からのアナキスト』）を飾り、劇場公開が待望されていた作品が『金子文子と朴烈（パクヨル）』と題して、2019年2月16日（土）から東京・渋谷のシアター・イメージフォーラム、シネマート心斎橋ほか全国順次公開される。（出演…イ・ジェフン、チェ・ヒソ、監督…イ・ジュンイク、韓国／カラー／129分）

また、金子文子関連書籍として、2月に岩波書店から『余白の春―金子文子』（瀬戸内寂聴／岩波現代文庫）、春には金子文子も登場する『女たちのテロル』（ブレイディみかこ）も刊行予定。2019年は金子文子イヤーになりそうだ。

文献センターだより

○**9月某日**　初めて静岡の墓前祭に参加。伊藤野枝についての熱き談義。

○**9月某日**　富士宮より上京し、東京事務所での通信発送作業に参加する。4名参加。

○**9月某日**　「明日書庫を訪問したい」と連絡あったが、すでに私に予定があり動けず、お断りの連絡を入れる。非常に残念だし、申し訳なかったが、こういう問い合わせはうれしい。

○**9月某日**　以前何回か寄稿していただいたフランス在住ガブリエル氏を介して、「米騒動100年プロジェクト」を知る。同氏がプロジェクト代表の方に本誌を送ってくれた縁。日本→フランス→日本、という海を2回超えたつながり。

○**9月某日**　8月に日本のアナキズム運動について問い合わせがあったオランダの方から返信。本誌の記事を翻訳して同国に伝えてくれるそう。

○**9月某日**　寄贈の問い合わせあり（詳細15頁）。重複する本もあったが、現行蔵書に痛みが進んでいるものがあるし、重複本を元に図書室（支所）を作りたいということもあり、一括で引き受ける。しかも目録まで作っていただいてしまい、大変感謝するばかり。

○**10月某日**　2019年のテーマに「エマ・ゴールドマン」と決めていた恒例のアナキズム・カレンダーだったが、アメリカの図書館に依頼している資料が届くのに時間がかかることが判明し、やむなく来年に延期。そのため急きょ、企画を練り直し、「近藤憲二没後50年」をテーマに決定。時間がない中で苦難のリスタート。

○**10月某日**　会員の蔭木達也さんより寄稿あり（今号掲載6頁）。これまで会員からの寄稿はあまりなかったので、素直にうれしい。

○**10月某日**　日本在住の外国人の方より、黒色戦線社の資料についての問い合わせあり。

○**10月某日**　今月は入会希望が3名あり。最近、入会が多くなったと思う。入会も簡単ではないのだが、より難しいのは継続していただくこと。

○**11月某日**　韓国から入会希望の金さんとメールでやりとりしていたところ、金子文子の勲章受賞を申請した本人と知りとても驚く。すぐに寄稿を申し込んだところ快諾をいただく（本誌5頁）。ご本人からの報告はとても興味深く。

○**11月某日**　東京で編集会議。上京できなかったのでネットで参加。私を含めて8名。次号の内容について。隔月刊行となる次々号（46号）からの体制については、私（古屋）が育児休暇（一年間）のため編集長から外れ、これまでのメンバーである奥沢さんと新たに編集委員となった山口智之さん、高橋幸彦さんの3名による責任編集体制でいくことを確認。次回の会議は1月14日。（というわけで、今号が私の編集責任者としての休暇前最後の号になります。前任者から引き継いだのが2012年8月の18号から。もう6年以上になりますが、お読みいただいた皆さま、ありがとうございました。新体制もどうぞよろしくお願いいたします。古屋淳二）

アナキズム文献センター通信第45号
発行／2019年1月1日
発行所／アナキズム文献センター
編集／編集委員会
連絡先／東京都新宿区新宿1―30―12―302
郵便振替口座／00850―3―30010
口座名　A文献センター
Eメール／contact@cira-japana.net
定価／一部100円